

■原著■

作品研究：インガルス一家の物語

武田京子*

Kyoko TAKEDA

(1989年1月20日受理)

A study on The LITTLE HOUSE Books.

開拓者の生活を描いた、ローラ・インガルス・ワイルダーの自伝的小説「インガルス一家の物語」を社会背景、家族の形態、機能の歴史的な変化を重ね合わせ、「家族」の物語として読み解くことを試みた。作者が作家として活動をはじめた時期は、一人の女性として人生を総括する時期であると同時に、アメリカ社会の転換期でもあった。

このシリーズが現代に読み継がれる要因として、開拓時代の家庭生活の実態を知る手引き書であることと、現代の子ども、母親が望む「家族の理想像」が描かれていることにある。

〔キーワード〕 ローラ・インガルス・ワイルダー、開拓者、家族の機能、テレビシリーズ化

I ローラは、なぜ書いたのか

ローラ・インガルス・ワイルダーによる『大きな森の小さな家』が出版されたのは、彼女が65歳を迎えた、1932年のことであった。文章を書くことに興味を持ったのが48歳、作家としては遅すぎるスタートである。その後、すぐに「ミズーリ州農業者」、セントルイスの新聞、「ミズーリ農村生活者」の各紙に、近隣の農場のこと、自然、家庭生活に関するエッセイを書いた。

当時の女性にとって、40代後半がどのような人生の時期に当るのか、明確に把握することはでき

ない。しかし、ローラ自身には、ロッキーリッジファームの安定した生活があり、一人娘のローズは、すでに、サンフランシスコのButtetin 誌の記者として活躍していた。ローラが少女時代に感じたのとは違った意味で、みちたりた「いま」を感じたとき、過去の経験を書きとめて置きたいと思ったのであろうか。

1915年、ローラ48歳の年は、一連の物語を書く大きな契機となった経験をした年である。8月、ローラはサンフランシスコの万国博覧会見物とローズ宅を訪問するため2ヶ月間、自宅を留守にした。彼女は、父親が死亡した際にドウ・スメット

*岩手大学教育学部家政科

へ帰った以外、これほど長期間に渡って留守にしたことはなかった。しかも、今回の旅は何の不安の材料もなく、日常生活と異った経験をし、未来を垣間見、過去をふり返える大きなきっかけになったことは間違いない。万国博覧会は、文明の最先端に行く技術、その他を多く展示するものであるが、ローラは、過去をふりかえる象徴ともいえる「パイオニア・マザー（開拓者の母）」という彫像と出会った。カリフォルニアの開拓時代を再現した、南太平洋鉄道の展示物の中にあつた、チャールズ・ガーフィーによるその作品は、開拓の道を進む人々を励ます婦人達の栄誉をたたえて作られたものであつた。二人のこどもを庇護するように立ち、サン・ボンネットをかぶった母親は、進むべき道を示すかのように右手をさし出している。鉄道の今日の繁栄以前には、幌馬車の苛酷な旅があり、そこには必ず、男達、子ども達、家族を支え励ましたパイオニア・マザーが多数いたことをローラに思い出させたに違いない。そして、文明が更に進み、当時のことを語る人々がいなくなると、これらの昔の記憶が風化してしまう危機感を持ったに違いない。

また、この旅はローラにとって、「文章を書くことが収入になる。」ことを知り得る機会となつた。娘のローズは、電信技術者、女実業家、新聞の執筆者兼通信員となり、世界中を旅行し活躍していた。ローラの滞在中も鉄道の物語やクライスラーの演奏会及びインタビュー記事などを書く仕事に忙殺されていた。「ローズに書くことのコツを教えてもらって、何か書くことができたなら、たぶん売ることができるだろう¹⁾」とローラは夫、アルマンゾに宛てた手紙に書いている。(9月13日付)ローズがどんな風に仕事をするかがわかってくるにつれて、「自分でも出来るという自信が付き、ローズとは違って、どこかで見聞きしたものを書くのではなく、自分の場所にとどまって感じたことを書く方が向いている」のに気付く。(10月4日付)ローラが、交通事故に遭つたことを知らせ

るローズの手紙の中には、「ミズーリ農村生活社紙から、いくつかの記事を依頼されたこと。来週中には書き上げ、いくらかの報酬を得ることになっていること」を知らせている。サンフランシスコ滞在中に、ローラは、書く技術を習得し、ローズの助言を受けながら、執筆者として一人前になりつつあつた。この記事は好評だつたらしく、博覧会終了後、ミズーリ州の展示物に関する記事を書き、博覧会の食べ物に関して作り方付きの記事を書いている。サンフランシスコからアルマンゾに宛てた最後の手紙には、「私は他のものを書くことで忙しいか、又は、手紙が届くまでに私の方が先に着いてしまうから、もう私から手紙を書くことはありません。」と書いている。(10月22日付)

彼女が書くことに目覚める下地として持っていた文章表現力、情景をこまかく読みとり適確に言葉に直す能力は、少女時代から培われてきたものであつた。姉、メアリーが失明した後、「こんどは姉の眼の代わりになって、自分の見たことを言葉で表現することを父親に約束し、実行したこと」「ブッチャー学校での教員生活を終え、また生徒として学校に戻つたとき、宿題の作文を短時間で仕上げ最高点を取り、文章を書くことに楽しみを見出したこと」からも推しはかることができるだろう。また、見たこと、感じたことを忠実に記録することは、ドウ・スメットからビッグ・アップル・ランドへの45日間の旅を克明に記録したことで既に経験済みのことであつた。読者を意識した書き方、技術を身につけることによって、自分自身の覚え書き(記憶)を書き直して行く作業は、ローラにとって楽しみをもたらす作業になったに違いない。ローラの技量が明確になるにつれ、ミズーリ州農業生活者紙は、新しい紙面をさき、「ある農場婦人の思い」というタイトルで連載を始めた。内容は、母親であること、家庭生活に関するお説教で古めかしいものであつたが、「時代おくれに見えようとも、持ちつづけ、伝えつづけていくに値する考えや価値がいくつかあるのだ²⁾」とい

うローラの主張を述べたものであった。

ここで、40代後半という年齢を合わせて考えてみるならば、子育ての完了、生活の安定という人生の一区切りの時は、『それは、多くの人々が満足とはいえない気持で過去をふりかえり、希望とはいえない思いで将来を考える、あの、人生のためらいの時期³⁾』であり、ローラの身边には、都会の狂気の中であくせくもがいている人々の姿があったのである。そして、幼いときに感じた満足感、心の安らぎの重要性に気づき、書きとめておくことの必要を痛感したにちがいない。『わたしは思うのです。生きることに価値を与えるのは、人生の基本的なことがらなのです。それはつまり、愛、義務、労働、休息、自然に親しい生活といった、すばらしい根本的なことがらなのです。』⁴⁾そして、人生の収穫期を迎えるにあたって、『目にみえない、もっと大切な収穫を数える⁵⁾』必要を感じたのである。ローラにとってパイオニア・マザーであった、母キャロラインの死(1924)、姉メアリーの死、そして、世の中は大恐慌の渦にまき込まれていた。国全体が、「アメリカとは何か」「これが、あの希望に満ちた、あこがれの土地なのか」と問いかけていた。ローラは、開拓当時の生き証人として、両親から聞いた祖先の記憶と自分の経験を記録する仕事に着手したのである。

II 「家族」のテキストとしての「インガルス一家」の物語

ローラの父方の家系は、フランス系カナダ人の流れを汲み、母方の家系は、コネティカットヤンキーである。ヨーロッパ各地から移民してきた人々はヤンキー(アメリカ人)として新しい人種を形成しつつあった。両方に共通していることは、「移住をくり返えず、動きまわる血統」である。ローラが父親や母親の昔語りや、自分の体験から把握した家族像は、1820年代から約100年間の西部開拓史上の家族像といえる。

1 開拓者にとっての家族

開拓者の家族は、南部のプランテーションを中心とした農業社会とは異なり、結婚によって次々と新しい一家を構える核家族である。出生児数は多いが乳幼児の死亡率は高く、結局、家族員は4~6人が普通であった。「結婚」は労働力の確保を、「出産及び育児」は労働の成果を継承することを意味していた。子どもであっても、成長に従って、それぞれの力量に応じた労働(仕事)が与えられた。子どものある未亡人は、労働の即戦力と考えられ、高く評価されたという。社会の中で男女比は、女1に対して男2~6であり、女性は暗黙のうちに結婚を強要された。開拓生活そのものに女手が必要であったことから、再婚は多かったという。家庭生活は、ピューリタンの道徳観を土台とし、相互の愛情を求め、家父長制の伝統に基づく夫の賢明な指導と妻の服従を理想として展開していった。

2 男性の仕事、女性の仕事

開拓者の男性は、新しい土地を開墾し農地として整備することが第一の仕事であった。開拓を主目的とする者は、安く手に入れた荒地を開墾し、農地にして転売し利鞘を収入とした。また、開墾した土地に定住し、農地を更に広げ肥沃にし、農業収入を生活の基盤とする者もあった。いずれにしても、はじめの数年間の生活は苦しく、現金収入が殆んど期待できない場合には、野生動物の毛皮を集めて物々交換をしたり、大工、鉄道敷設、カウボーイなどの日雇い仕事をして自給自足できない物資の購入に当てた。これらの賃労働をする場合、家族を置いて出かけることも多く、交通・通信が密に出来なかった当時は、生命の不安を感じさせるものであった。男の働き手を一時的に欠く場合、その不足を家族、主に主婦が補い、更に生じた労働力の不足は、近隣の人々の協力をたのんだ。家の建築、井戸掘り、収穫等、多くの労働力を必要とする場合にも近隣の労働力は提供され

た。伝統的な家父長制が強かった東部社会からやってきた開拓者たちは、夫婦が相互に協力しなければ生活することが不可能な状況に置かれ、自然に家庭内に於ける女性の地位の向上につながっていった。

女性は、妻として、母として、好き嫌いに関係なくたくさんの仕事をこなさなければならなかった。単に「食事づくり」といっても、献立を考え調理するだけでなく、野菜の栽培、養鶏、乳牛の飼育、乳製品作り、ハム、ベーコン、ソーセージ、ピクルス、ジャムなどの貯蔵品作りまでが含まれていた。衣生活に関することも同様で、糸紡ぎ、染め、織り、編み物、洗たく、アイロンかけ、帽子、靴作りまで家庭内で行われていた。女性は育児・家事を中心にした労働の他に、生産機能を担う存在として期待されていたが、あくまでも軽作業中心であり、男性の補助としての役目にとどまった。男性と同じ作業を行うことは敬遠された。社会全般の人手不足から、あらゆる職種が女性にも開かれていたというが、実際は死別した夫や父親の仕事を引き継いで行う場合がほとんどであった。

開拓の先端地域では、単身者のための食事作り、シャツの縫製、洗たくなどの仕事が重要であり、ローラ自身も縫い子、食事づくりの仕事を行った。時代とともに女性の職種は拡大し、妹キャリーは活字印刷工、娘ローズはジャーナリストとして活動の場が広がっていった。

家計管理もまた、女性の仕事であった。農地の購入、売却の決定権は男性にあったが、日常の家庭内の物品や金銭の管理は女性が行った。実際は金銭のやりくりよりも物品の有効な活用が中心であり、布地など新しい物が購入できない場合には、きょうだい間でお下がりとは当然のこと、小布、古布に至るまで保管し活用した。

3 家族の機能

社会の最小単位として家族という集団が存在す

る、というのが一般的な考え方であるが、開拓者にとっては、家族そのものが社会生活であることが多かった。他の親族との接触は、年に数回あるかないかであったし、近隣の人々との接触も少なかった状態では、家族の協力なしで生活することは不可能であり、現代の家族と比較すると膨大な機能を持っていたはずである。

アメリカの社会学者、オグバーンは、家庭で行われるさまざまな仕事に関する実証的な研究を行っている。産業化により家族の機能が縮小したと論じ、近代工業が勃興し、大量生産が可能になり大量消費が実現し、そのために職業の専門化と専門的なものの制度化が進んだという。1930年、農場家族の3分の2、農村市街地家族の4分の3、都市家族の10分の9がパン工場製のパンを食べ、自家製のパンを焼く家族は、予想以上に減少していたという。他に缶詰め造り、男子服の仕立てが行われなくなり、レストランが増加し外食の機会が増加した。経済的機能の縮小は住生活にも反映し部屋数が減少した。家庭内の生産活動に参加する女性の分野が少なくなった反面、家庭の外へ仕事をする女性が増加した。以前の家族は、経済(生産と消費)、地位付与、教育、保護、宗教、愛情、娯楽という7つの機能をはたし、そのために影響力と威信を持っていた。しかし、時代の流れとともに、愛情以外の機能は企業、学校、政府などの専門的な組織に吸収され、家族から失われるか残っていても弱まった。

ローラが「インガルス一家の物語」で語った家族の生活は、少しずつ近代化の動きが変化をもたらしつつあったが、オグバーンの言う以前の家族の機能は維持していたと言える。

① 経済機能

衣食住にわたって基本的な考えとして、「自分たちで作れるものは作る。どうしても必要なものは物々交換で入手する。代用できるものは出来るだけ工夫する。無しで済ませることが出来るなら、

手に入るまで我慢する。」ということがはっきりしていた。

ローラの家では布を購入し仕立ては自分の家で行った。アルマンゾの家では、羊を飼い羊毛を梳くことは機械に頼ったが、紡ぎ・草木染めをし、手織で布にし家族の服を仕立てている。下着、それに付けるレース、くつ下、セーター等も全て家庭内で作られた。縫い物は、上手、下手にかかわらずこなさなければいけない主婦の仕事であった。新しい布の裁断は母親が担当し、裏返しをして縫い直すのは女の子に割り当て、縫い方の技術を修得するのである。敷物、カーテン、シーツなども家庭内の手作業で作られた。

食に関しては、主食副食の農作業の栽培、家畜の飼育、野生動物の捕獲も自分たちで行った。パンを焼く際にイーストが手に入らなければ、パン種を残しておき自然の発酵を待ち「サワードウ」として使用するなどの工夫を行った。材料は余すところなく活用し、牛を一頭殺した時には様々な加工食品の他にローソクや石けんまで作り出した。

入植初期の農地から生産が期待できない場合には、最小限のパンを焼くための小麦だけを購入し、卵、ハム、ソーセージなどを食べることはあきらめ、一番安い豚の塩づけ肉を、常食としたのである。

住いに関しては、ウィスコンシンの大きな森、大草原、プラムクリークとどこへ移住しても自分達の家、井戸、炉、家具は自分達の手で作った。木材の切り倒し、製材は自分で行い、購入するのは、屋根ふき用の薄い木材、窓用ガラス、釘だけであった。テーブル、揺り椅子、飾り棚作りは、夜や冬の手間仕事として行われた。寝具作りは、主婦の仕事であり、古くなった衣服を活用し、これらのものが作られた。マットレスの中には干し草が詰められ、春と秋の大掃除の際に外側は洗たくされ、中身は入れかえられた。衣生活の中で、近代化のしるしを探がすとすれば、ミシンがそれにあたるであろう。ミシンは、1846年、エリアー

ス・ホーによって発明された。その後シンガーマシンが量産され、1863年、12ヶ所の工場で7万台のミシンが生産された。同じ頃、イギリス国内での生産高は2万5千台であったというから、アメリカでの普及率が高かったといえる。ローラが、クランシーさんの店ではじめてミシンを見たのは、1881年のことであり、ローラの婚礼衣装づくりのために購入されたのは、その4年後のことである。

② 教育機能

教育については、一人前の生活が出来る能力を身につけさせる面と人格を形成する面の二面が考えられる。男の子は幼いときから、一人前の百姓になるための農作物、家畜の知識と技術の習得が年齢に応じた作業の分担という形で行われた。アルマンゾは、仔牛の世話、乳しぼり、仔牛ならし、種イモ植え、野菜のタネまき、丸太運び、羊毛刈りの手伝いをしながら、自分の目で見て身につけることをくり返して行く。女の子も同様に、皿洗い、ベッドメイキング、洗たく、食事づくり、野菜の手入れと収穫、ニワトリの世話、縫い物、編み物を手伝いながら覚えて行く。日常生活を通して生活技術を身につけると同時に人格教育も行われた。

学校教育に関しては、人口調査簿に、ある程度の記録は残っている。学校は、開拓の先端の土地では常設のものではなく、期間を区切って教員が派遣されたり、土地に住む有資格者が教師となって開設された。年齢構成は様々で、時には、教師の方が生徒よりも年齢が低いことさえあった。ローラがメアリーとはじめて学校へ通うようになったのは、1875年ローラが8歳の時である。教科書は共通のものを使用していたので、学校へ行けないときには、自習することが可能であった。ローラの母、キャロラインは、結婚前に教員をしていた経験があり、教育には熱心で子どもはできるかぎり学校へ通わせること、子どものうち一人は教員にさせたいという希望を持っていた。教育の資格を

とるには、資格試験に合格することが必要であり、能力に応じて免許状が与えられた。

人格形成についての教育、つまりしつけに関しては、大人と子どもの区別、男女の区別を明確にするものであった。食卓では「子どもたちは、おとなに見てもらっただけで、聞いてはもらえない」という決まりがあり、食事中は大人の会話に口をはさむことは許されず、取りわけられた食事を黙々と食べるだけであった。食事以外の時であっても、おとなの会話に口をはさむのは行儀の悪いこととされていた。3歳頃になると、しつけは厳しくなり、「わがままのツボミは刈り取ってしまわなければならない」と考えられた。しかし、年齢の低い頃は体罰を与えるのではなく、しっかり言いかせる方法がとられた。時代が下るにつれて、しつけの厳しさはゆるやかになったようである。ローラの祖父の時代は、安息日は土曜の午後からはじまり、してはいけない事柄はたくさんあった。ローラの時代になれば、日曜日だけになり、労働以外の事柄であれば読書等は許されるようになった。男に対するしつけは厳しく、ムチ等の体罰も多く与えられたが、現実の社会の中で男性の方が苛酷な経験をする可能性を多く含んでいたためと考えられる。家庭の中では男性が優位であり、思わず反発を含んだ意見を口にしてしまう母親が父親にあやまる姿が数多く描かれている。

③ 保護機能

保護機能の中には、野生動物、外敵に対する防衛及び軍事の部分と病気に対する治療の医療、幼い者・老人に対する福祉の部分が含まれる。政府は、独立戦争、メキシコ戦争、南北戦争を経験し軍備そのものは整ってきたが、フロンティアのインディアンとの対立に関する軍事的な保護は、後手、後手になりがちであった。前もって軍隊を派遣することは、インディアンを刺激することであり、国が軍隊を実際に派遣するときは、事件の発生した後の事後処理であることが多かった。イン

ディアンとの接触のある地域では、対立を起さないようにうまく処理していくことが必要であった。インディアンの言葉が理解できないときは、逆らわずに要求をのみ、タバコや食べ物を提供しなければならないときもあった。ローラ一家がインディアンテリトリーに入植した後、白人とインディアンとの間には、土地所有の条約をめぐって神経戦がくりひろげられる。結局、インディアンは戦うか逃げ出すかの選択をせまられ、土地から出て行くことになった。最終的には白人側の勝利になったが、その場にいる者にとっては、国の保護は期待できず自分自身で身を守ることを要求されることになった。物語の中でローラ一家は、インディアンテリトリーには一年間住んだだけでこの土地を後にする。実際は、大きな森の土地の売却が不成立になったためであるが、物語の中では、ローラ一家の土地がインディアン保留地になっていて立ちのきを命ぜられたことになっている。馬泥棒などの被害によって移住の途中で挫折する者も多かった。

人間ばかりでなく、開拓地では、野生動物に対する防衛も考えなければならなかった。熊、チータ、バッファロー、オオカミ等は家畜を狙って人家に近づいてくる。男手がないときには、女性が代って銃を持ち防衛したし、番犬の必要性も高かった。野生動物のうち小形のものは農作物に被害を与えることもあったが、時にはたんばく源として食卓を賑わした。

開拓地にあっては、病気の治療、出産などは自力で克服するもの、又は近隣の者たちと協力して克服して行くものであった。ねんざ、雪盲、虫さされなどには、家伝の秘薬や民間療法が活用された。開拓地には、時おり巡廻の医師が訪れたことは、大草原で一家全員がしょう紅熱にかかったときのエピソードからわかる。大きな町には開業医がいたが、支払い、薬代、手強い人の礼金など多額の出費につながった。

④ 宗教機能

人々が定住し、民家、商店が出来、町が形成されると次に出来るのは、教会と学校であった。当時の人々は、何よりも宗教を大切に、教会は心のよりどころとなった。教会の建設に関しては、熱心に協力し、ローラの父は鐘楼のために出かせぎをして作った新しいブーツのためのお金をそっくり献金してしまった。教会は、開拓地へ巡廻の牧師を派遣し、新しい教会を組織した。教会は、日曜毎の礼拝や日曜学校の開かれる場所であっただけでなく、宗教強調集会やニューイングランド夕食会など娯楽を兼ねた催しを行う場となった。

教会が近くにない場合には、家庭内で宗教行事は行われた。主導権を持つのは父親で、日常の食前の祈りも父親を中心に行われた。日曜日は安息日として仕事を休み、聖書を読み聖句を暗唱する。復活祭、クリスマスの祝いは、生活の豊かさにかかわらず、けじめとして行っていた。

⑤ 娯楽機能

日常生活の潤いとして、苛酷な労働の後には娯楽が必要であった。父のバイオリン、歌、昔話、物語や雑誌の朗読、ゲーム等が家族共通の娯楽として、日々の生活に色どりをそえた。日雇い仕事の時に覚えた歌を家族に教え、幼い時から繰り返えし歌われた歌は、家族共通の思い出となった。「長い冬」の時、燃料の干し草よりで手が荒れて、父親がバイオリンを弾けなくなった時、歌は家族を勇気づけるのに有効であった。

聖句の暗誦もゲームとして数を競うときもあった。しかし、娯楽よりも人格形成の意味合いの方が強かった。

「わたしは、昔ふうのやり方で、聖書の暗誦聖句をおぼえました。そして、いちど、日曜学校のだれよりもたくさん聖句を正しく暗誦できたので賞をもらいました。けれども正しい暗誦はできるものの、わたしの頭には、いつも、ここでひとつ、あそこでひとつというように聖句をえらびとって

は意味の上でいっしょに結びつけてしまうくせがあるのです。こんなふうになっているうちに、心の中に貯えた目に見えない収穫を自分にとって大切なものにするひとつの考えが浮びました。わたしが心の中に貯えている聖句はだれでも知っているものです。けれども、聖句のならべ方しだいで、このよく知られた聖句を大切なものとして生かす考えが生まれるのです。⁶⁾」ローラは、記憶した聖句を心の中で、人格の中で生かす知恵を身につけたのである。

書物、雑誌、新聞は数が少なかったため、同じものが家庭内でくり返えし読まれた。購入することは少なく、隣人間で交換したり、古着などと同様にプレゼントされるものであった。

子どもが成長して行く過程では、いろいろな遊びが工夫された。ブタを屠殺するときには、膀胱はふくらませてボールとなり、しっぽはあぶり焼きにして、子どもたちを楽しませた。冬の間の雪の晴れ間には、外気に触れるために、木の切り株から雪の上にパタリと倒れて形をとる「絵づくりごっこ」が工夫された。おとなたちは、仕事の合間にブランコやソリをつくってやったりしている。

おとなのための娯楽としては、近隣の友人や親族が集まって過ごす、クリスマスディナー、砂糖づくりのダンスパーティなどがあった。

Ⅲ 「インガルス一家の物語」に関する評価

定松正氏は、『家庭小説としてのワイルダーの作品世界⁷⁾』の中で、読者の観点によって、ジャンル分けの多様性のあることを指摘した後、彼自身は、個人の成長を軸とした家族の生活記録としてワイルダーの作品を位置づけている。家庭小説は子どもを独立した個として観ようとする「アメリカ社会思潮の変化から生まれた文化的所産だ」とし、「社会の変化に応じて、子どもと共に変化するところこそ、＜アメリカの夢＞の実現に通じることを認識したからにはほかならない。それが1930年代、

40年代にはいって開拓者や辺境の厳しさにめり込められたその道筋をもう一度ふり返えるような作品が頻出してくる。』『メリッサアン (1931)』、『去り行くサリー (1934)』、『キャディウッドロウン (1935)』などが開拓者時代を背景にし、一家のルーツや相克を語る形式の代表者とし、「アメリカ的信条の産物」であった物質文明、資本主義の挫折を見て、アメリカ生活の原則をさぐる意図を持っていたであろう。

家族そのものについて当時をふり返えると、第一次大戦終了後から1920年代にかけては、繁栄と娯楽の時代といわれたが、1929年にはじまった大恐慌は、アメリカにとどまらず世界中で大混乱を引きおこした。30年代を通じての深刻な不況は、生活不安を伴い、家庭を持つことが困難になった。人口千人当りの結婚率は、10.1 (1929) から7.9 (1932) と減少し、それによって出生率も18.9 (1929) 17.4 (1932) 16.5 (1933) へと下る傾向を示し、離婚は一貫して増加の傾向を示した。生活の不安を家族の力で乗り越えて行くことは、過去のものになりつつあったのである。

1930年、ローラはローズの頼みによって昔の思い出話を書きはじめた。

「子どもたちのための物語を書きはじめたときわたしは、たった一冊の本のことしか考えていませんでした。何年ものあいだ、わたしは、父がわたしにしてくれた話をほかの子どもたちに伝えるべきだと思っていました。父がしてくれた話はとてもおもしろいので、このまま忘れさられてしまうのは、あまりにおいと感じたのです。そこで、わたしは、『大きな森の小さな家』を書きました。あの本は、愛情が書いたもので、ほんとうは父の記念だったのです。⁸⁾」

一年後、ハーバース社の編集者は帰省中の列車の中でこの原稿を読み、夢中になりすぎて乗りすごしてしまう。1932年、『大きな森の小さな家』は出版され、国中の批評家に賞賛され、父と母と祖先の記憶と思い出のために書かれたこの本は、

たちまちアメリカ民族の記憶として共有されるものとなった。その後1943年までに計8冊の本が出版され、現在、我々はローラの死後出版された「はじめの四年間」「わが家への道」を加えて、ローラが開拓者として生れ育ち、農民として定住し成功するまでの足跡をたどることが出来る。後の2冊は、ローラの死後、草稿のまま発見されたため、文体は大きく違っている。

「はじめの四年間」の冒頭に収められている、ローズの弁護士、ロジャー・リー・マクグライド氏のまえがきによれば、「はじめの四年間」の原稿は、シリーズの他のものの草稿と同様に、学校用はぎとりノートにローラが鉛筆で書いた形で発見された。1940年代の終わり頃、彼女は草稿を書いたが、アルマンゾの死後、訂正し完成して出版することに興味を失ったらしい。1970年、ローズの死後出版されるにあたって、マクグライド氏は「私たちは、皆ローラの物語がもっとあればよかったと思っている。私たちは、彼らの人物と精神の特質を知り、それをいつくしむようになった。彼らは私たちの人生の一部となり、その人生に意義を与えた。しかし、もし、この物語がこれ以上あり得ないというなら、私たちは、自分たちの人生の物語を彼女の物語に劣らぬ価値のあるものにするを祈ろう」と語っている。

「インガルス一家の物語」は、開拓者の記録物語として、ひとりの少女の成長の物語として、更に「家族」の物語として評価されているのである。

「この物語をフィクションと呼ぶ理由があるとすれば、それは三人称の叙述形式で距離感をもって書かれ、自叙伝というよりは物語ふうに語られているからである。ここに書かれていることは、すべて実際に起ったことばかりであり、人物の名前すら変えられていない。それは、前世紀の70年代以後の素朴で困難だが、きわめて幸福だった生活の客観的な絵である。ウィスコンシン州からミネソタ州をへてサウスダコタ州へ、西へ西へと移動していくインガルス一家は、身のまわりの品の

ほかには、ほとんど無一文だという意味では貧乏だが、ほんとうに重要なものすべてについては心ゆたかである。幸福は人間がなにを所有しているかということには、ほとんど関係がないことを、これら8冊の本はおくびにも出さずあきらかにしている。ほかの巻もそうだが、しかしとりわけ『長い冬』は家族の団結と自然力の暴威とたたかう愛のあたたかさをつよく訴えて深い感銘を与える⁹⁾」

「移住した地方の未開の自然と、それに素手で立ち向かう父親と母親と小さな娘たちの生活が実感をこめて再現されているところにこの一大絵巻の最大の魅力がある。いわば、西部開拓史の最も地味な部分が、色彩豊かにぬくもりをもって再現されているのである。ワイルダーはプリンク（キャディウッドロウンの作者）のようなドラマチックな設定によるアメリカ的信条の謳歌をせず、生活そのものが生命をかけた冒険であった時代の日常生活を描くことにより、子どもの普遍性とアメリカの発展のエネルギーの原型を把握することができた。¹⁰⁾」

日本では、この作品はどのように受け容れられて来たのであろうか。「長い冬」（1949）、「大きな森の小さなお家」「草原の小さな家一少女とアメリカインディアン」（1950）、「新しい大地（プラムクリークの土手で）」（1959）の順に翻訳された。

「活動的で向日的な新しい子ども像という意味では、ローラ・インガルス・ワイルダー作『長い冬』上・下（コスモポリタン社S24）、『大きな森の小さなお家』（文祥堂S25）を始めとするアメリカの児童文学作品も人気を集めた。著者自身の少女時代を題材にした自伝的なこの作品は、開拓者時代のアメリカの厳しい自然や社会がリアルに描かれるとともに、その中で生きる人々のフロンティア精神に根ざした素朴で楽天的で行動的な逞しい生き方が描かれていた。¹¹⁾」

何かと出版統制の厳しかった戦後期、戦勝国アメリカの偉大さを支えるものをアピールするのに

大きな意味があったのかもしれないが、厳しい自然（現実）の中で生き抜いた人々の姿を描いた作品が、今後の生活を再建して行く子どもたちへの励ましや支えとして意味を持つことが期待されていたのではないだろうか。

第二次大戦後、アメリカは再び繁栄の時代を迎え、アメリカ社会は民主主義の理想を実現したと言われる一方で社会全体は保守化していった。社会が安定し結婚率も出生率も上昇し戦前のレベルまで下がることがない一方で、離婚率は上昇したままである。家族や家庭に関する考え方も変化して行った。50年代には、女性の幸福な家庭に対する憧れの高まりがあり、テレビの普及にともなってこの風潮は浸透し、初婚年齢の低下、専業主婦化の傾向をもたらした。60年代以降、キューバ危機、ヴェトナム戦争の失敗によって経済は悪化し、生活は安定しなかった。親子よりも夫婦を重視する傾向が高まり、離婚法の改正に伴って、1960年から80年の間に離婚数は約100倍となった。アメリカの家族を支えていた「家父長制や男尊女卑の伝統」や「女性に貞節と忍従を要求するヴィクトリア朝的女性観」が崩壊し、性の役割、夫婦分業が曖昧になり、家族自体に関する考え方も変化したのである。

社会の中で家族の存在価値が稀薄化して行く中で行われた、アメリカ二百年祭記念行事は、建国開拓から現在を見なおす様々な行事の中で、現在のアメリカを形成する土台としての家族を思い起させるきっかけとなった。アメリカNBCは、「インガルス一家の物語」をシリーズ映画化したのが、これは、家族の意味が失われつつあることへの警告の意味を含めて制作されたものである。同一の配役で長期間にわたって制作するという形がとられたため、原作の筋とは違った内容になっているが、「家族への愛」「人間の絆」など現代の家族が手に入れにくいもの、開拓時代の家族を支えたものがテーマになっている。特にシリーズ後半になると原作から離れた展開になり、テーマは人間

愛、家族・親族・夫婦愛、家族と社会の人々との関係に集中している感がある。日本では、NHKで放映され、昭和49年3月のパイロット放送を第一回とし、その後、中断を含めて昭和63年3月12日の最後の放送まで14年間放送され、視聴率は10%を維持していたという。このテレビシリーズをきっかけとして、ワイルダーの原作を読む子どもが出て来ても不思議ではない。

子どもの本離れ現象が警告される中で、このシリーズは親子（正確に言えば母娘）二代にわたって読み継がれる数少ない作品の一つということができるであろう。

「子どもを厳しくしつけ、危険にあえて直面させて、その解決策を自分で発見させる父親、子どもへの愛情を毎日の具体的な行為で裏づける母親¹²⁾」

「宿題もピアノのおけいこもそっちのけで熱中しているだけあって、Mが本の中からつかんで来るものは、とても確かなように思われるのです。いつか何気なくMが言っていたのですが、「お母さん、大草原の本に一番多く出てくる言葉は何だと思う？『みちたりていました』という言葉なんだよ」というのです。それを聞いて一瞬ぎくりとしてしまいました。いつも能率的に家事を進めることを考え、子どもたちにも「先々のため」などとあれこれ要求する自分が、何か前のめりに貧しくなっていくように思っていた矢先だったからでした。日々の生活の中で何だか欠けていきつつあるようだった大切なものを、ほかならぬMによって指し示された思いがしたのでした。¹³⁾」

上の二つの批評が示すように、日本では、「インガルス一家の物語」は、開拓の生活を知るためというよりはむしろ、失なわれつつある家族の本質を把握する方に重点を置いた読みとり方がされている。時代を越えて語りつがれて行くものの本質には、血湧き肉躍る冒険よりも、安らかな暖かさの中にある真実のきらめきの方がふさわしいのかもしれない。このことについて、ローラは次の

ように語っている。

「小さな家の物語は、遠い昔の物語です。でも、本当のものは変わらないのです。いつだって、正直で誠実でいることが、いちばんいいのです。自分にできることは精一杯やって、小さな喜びにも幸せを感じ、失敗してもくじけないでください。あなたを幸せにしてくれるのは、あなたの持っている“もの”ではなく、愛情と、思いやりと、おたがいに助けあうことと、そして何よりも“いいひと”でいることなのです。¹⁴⁾」

<引用文献>

- 1) West from Home - Letters of Laura Ingalls Wilder San Francisco 1915 Harper & Row (1974)
- 2) ドナルド・ゾカート いけもとさえこ訳 『ローラインガルスワイルダーの生涯(下)』 206頁 パシフィカ (1979)
- 3) 『前掲書』 198頁
- 4) 『前掲書』 202頁
- 5) 6) 『前掲書』 204頁
- 7) イギリス児童文学学会編 「児童文学世界」 No.3 中教出版 (1980)
- 8) 『ローラインガルスワイルダーの生涯(下)』 215頁 パシフィカ (1979)
- 9) J・R・タウンゼント 高杉一郎訳 『子どもの本の歴史』 276頁 岩波書店 (1982)
- 10) 瀬田・猪熊・神宮 『英米児童文学史』 339頁 研究社 (1971)
- 11) 「子どもたちが魅入られた海外名作」 西崎康雄 『別冊太陽 子どもの昭和史 昭和20～35年』 平凡社 (1987)
- 12) 週刊朝日 (昭和49年1月4日号) 書評欄
- 13) 菊池慶子 「若いお母さんたちへ」 『幼児の教育』 84巻12号 (1985) フレーベル館
- 14) ローラ・インガルス・ワイルダー 谷口由美子訳 『わが家への道』 176頁 岩波書店 (1985)